

今、この人に **いんたびゅう** Interview

大津市葛川地域の空き家再生に取り組む

宮田 ワンダ さん

**古い空き家こそ、この地域が未来に残すべき財産。
ここに魅力を感じて移住する人たちを増やし、
この地域を守っていきたい。**



■来日のきっかけは？ もともと日本の文化に興味があったのですか？

初来日は高校生の頃で、交換留学生として広島に来ました。といっても日本に興味があったわけではなく、どこでもいのでアメリカから脱出したかったんです。本当は、英語が通じて牧歌的なイメージのあるニュージーランドへ行きたかったのですが、自分で留学先を選択できず、日本に来ることになりました。でも日本での高校生活にはあまり刺激がなかったため、高校を卒業した後の余った数か月で、鳥取や北海道をまわって、農業の手伝いをさせてもらったりしました。その頃から、日本の田舎の生活や風景が好きでした。

■その後、アメリカに戻って、また日本に来られたということですか？

はい、アメリカの大学で日本語を勉強しようと思い立ち、その前にもう一度来日して日本の大学で1年間、日本語を勉強しました。その後アメリカのミシガン州の大学で改めて日本語を学びました。卒業後は、アメリカで夫と結婚して、再び日本に来ることになりました。しばらくは神戸で暮らしていましたが、田舎の古民家で暮らしてみたいという思いを持つようになり、夫といろいろ探して見つけた葛川のこの家に、35年前に引っ越してきました。

■35年前に来られたときの葛川的印象はどうでしたか？

もともと田舎が好きだったのですが、葛川には山の緑に囲まれた中に日本の伝統的な茅葺きの家があって、すごく魅力的だと思いました。古い民家にある囲炉裏や縁側、それに雨戸を入られる戸袋に感動しましたね。ただ、この地域には当時から60歳代以上の人が多く、同世代の人はあまりいませんでした。都会と田舎、それに文化も世代も違うので、地元の人とはお互いに、水族館で魚を見ているような感覚がありました。子どもの同級生は5人だけでしたね。当時は子育てと仕事に追われて、あまり地域の人と交流する余裕もなかったです。

■それから35年の間に、どんなことが変わりましたか？

当時は京都から葛川を結ぶ国道367号の道幅がとても狭く、カーブの連続で車の

すれ違いも大変でした。でも一つしかなかったトンネルが5つになり、道幅もすべて2車線に広がったので、道路事情がすごく良くなりましたね。通勤時間もぐっと短縮されたので、京都に行くのもすごく楽になりました。私自身はアメリカでも、車しか移動手段のない地域に住んでいたのであまり苦になりませんでした。道路事情がよくなったことで、京都からこんなに近いところで、自然に囲まれた田舎暮らしができる環境があるなら、もっとここに住む人が増えてもおかしくないのでは、と思うようになりました。

■過疎化しているこの地域に、もっと移住してきてほしいという思いから、空き家清掃の活動を始めたのですか？

そうですね。葛川の人口は今年1月時点で128世帯、218人と、マンション戸分ぐらいの人数しか住んでいません。高齢化も進んでいて、誰も住まなくなった空き家がたくさんあります。この空き家を何とかしたいと、村づくり協議会（現在はまちづくり協議会に移行）でリストアップする取り組みが始まっていたのですが、ちょうどコロナ禍で私も仕事が減り、葛川で過ごす時間が増えたこともあって、ボランティアで空き家の清掃活動に取り組むようになりました。

■具体的にはどんな流れで、空き家の清掃を行うのですか？

まちづくり協議会が窓口になって、空き家を貸したり売ったりしてもいい、という持ち主と連絡を取り、許可を得た空き家に入って掃除をしています。40年間も放置されていた家もあり、中に入ると雪が積もったように真っ白になっていたりすることもありますね。修理が必要な場合もありますが、1年分の家賃を修理に充ててください、と言ってくださる人もいて助かっています。田舎では、他人に家を貸すことはなかなか難しい面もあると思うのですが、人口の減っている葛川で、移住者のために家を貸すというのは立派な地域貢献になっていますし、素晴らしいことだと思います。私自身も、空き家をきれいにすることで、移住する人を増やす力になればと思っています。

■この活動を始めてから、移住する人は増えているんですか？

そうですね、最近も家族ぐるみで移住してきた方が4世帯おられます。若い世代

▲空き家を掃除すると、古い食器や家具などがたくさん見つかるんです。そこから、当時はどんな暮らしをしていたんだろうと想像するのが楽しいですね。使える食器や家具は地域のひとと分け合って、なるべく再利用してもらえよう工夫しています。

●プロフィール●

アメリカ・ノースカロライナ州出身。高校の交換留学制度で来日したことをきっかけに帰国後、アメリカの大学で日本語を本格的に学ぶ。その後アメリカで結婚した日本人でカメラマンの夫と共に日本へ。神戸で暮らしのち、古い日本家屋での暮らしに憧れて大津市葛川へ移住した。企業向け英会話講師や特許の翻訳業務などを手がけながら、田舎暮らしを楽しんできたが、コロナ禍で仕事が減少。在宅時間が増えた



ことをきっかけに、放置された空き家清掃に取り組んでいる。

を中心に、移住したいという人は以前よりも増えていると感じています。外国人の私と同じで、若い世代の人にとっては、葛川の暮らしはすべてが新鮮に見えると思います。今も、10世帯ほどの移住希望者がいると聞いています。インターネットがあればどこでも仕事ができる時代なので、空き家が住める状態になれば、移住する人も増えてくると思っています。

■最後にお聞きします。ワンダさんはこの葛川をどんな地域にしていきたいですか？

私の力で、何か大きなことを変えることができるとは思っていませんが、せっかく今まで残されてきた歴史のある伝統的な建物を、これからも生かせるようにしていきたいですね。大阪に37年住んでいるアメリカ人の友人がいるのですが、茅葺きの家を見て「こんな面白い形の家、大阪では全然見たことがない！」ととても驚いていました。そうした文化を守っていきたくて、新しくこの地域に入ってきた人々には、ここに魅力を感じて移住してきているという共通点があるので、そんなつながりを生かしてコミュニティを作り、新しい形でにぎわいを作っていければいいなと思っています。